

## 当院における乳癌術後再発症例の再発後の予後を規定する因子についての解析

乳癌には様々な性質があるため、手術や放射線治療などの局所療法と化学療法、内分泌療法などの全身療法を効果的に組み合わせる集学的治療が行われていますが、残念ながら術後に再発・転移をきたすことがあります。再発後の予後（見通し）もまた患者さんそれぞれの乳癌の性質により異なります。京都大学医学部附属病院乳腺外科（旧第2外科）で1980年から2005年に手術を受けた手術時に転移のない（Stage I-III）乳癌患者さんのデータを再検討して（これを後ろ向き試験といいます）、手術時の年齢・手術、腫瘍の大きさやリンパ節転移の有無・病理組織検査結果などから、乳癌再発後の見通しを予測できる要因を調べています。再発後の見通しを予測できる要因がわかれば、よりきめ細かな治療に役立てることができます。この研究は京都大学医学部医の倫理委員会の審査・承認（承認番号E-627）を得ています。